



オールラウンダー

魔境育ちの全能冒険者は 異世界で好き勝手生きる!! 3

追い出したクセに戻ってこいだと?
そんなの知るか!!

α L P H α L I G H T

アノマロカリス

Anomalocaris

目次

第一章

「いんねんのたたかい？」
007

第二章

「きゅ～ゆ～？ とさいかい！」
183

Makyo Sodachi no All-rounder
Ha Isekai de Suki Katte Ikiru!!



主な登場人物

Main Characters

シドラ

ダンジョン内で発見されたタイニードラゴン。体に似合わずかなりの大食漢!

ザッシュ

リュカをチームに引き込むが、身勝手に利用して追放した通称「自分に都合の良い男」。

ガイアン

肉体に絶対の自信を持つ冒険者。情報収集にも長けている。

リュカ

本作の主人公。全属性の魔法や卓越した剣術などあらゆる能力を使いこなすが、家族には頭が上がらない……?

リッカ

リュカの双子の妹。聖女候補の修業をしている。お金が大好きでずる賢いところも。

シオン

ちょっとびり天然なザッシュのパーティメンバー。支援魔法が超得意!





第一章

「いんねんのたたかい？」

Makyo Sodachi no

All-rounder Ha

Isekai de Suki Katte Ikiru!!

第一話 新たな生贖（これで僕から注意を逸らすことが出来ます）

僕、リュカは一人、ゴルディシア大陸で最も栄えた街、カイナートにある冒険者ギルドへ向かっていた。

その最中、周囲の人々から好奇の視線を向けられているのに気付く。

……まあ、それも無理ないかもしれないな。

少し前に起きたとある一件のせいで、僕の名前はこの辺りに広く知れ渡ってしまっただの。

僕は心の中で溜息を吐きつつ、これまで起きたことを思い返す。

二年前、僕は故郷であるカナイ村を出て、カイナートで冒険者を始めた。

【烈火の羽ばたき】というパーティに拾われ、夢だった冒険者生活が始まる……と思ったのも束の間、リーダーであるザッシュに二年間荷物持ちとして散々こき使われた挙句、最終的にはパーティを追放されてしまう。

それならと気持ちを切り替え、ソロ冒険者として活動することに。

仲間もいないし苦労するかな……と思っていたんだけど、依頼はパーティにいた時より楽にこなせるし、みるみるうちにランクが上がっていく。

どうやら僕は、家族であり、かつて最強パーティと言われた【黄昏の夜明け】のメンバーに鍛えられたため、世間一般の基準に照らして見ると、かなり強いらしい。

それからしばらくして、双子の妹のリッカが世界各地に散らばる七つの穢れた地を浄化する試練——『聖女候補の巡礼旅』に挑もうとしていることを知った。

僕は護衛としてその旅に同行することになった。

【烈火の羽ばたき】時代に、僕に唯一優しくしてくれたガイアンも仲間に加え、僕達はカナイ村とカイナートの間にあるハサミシユ村へ。

ちよっぴり苦戦したもの、なんとか浄化を済ませ、続けてサーデイリアン聖王国領内の、トライヘリア港の近くにある、二つ目の試練をクリア。

そして三つ目の穢れた地を探して、僕達はバストウーグレスシア大陸にある魔法学園に潜入した。

そこでは生徒の魔力が突然枯渇したり、従魔が暴れだしたりと、不可解な出来事が発生していた。

穢れた地の近くではこのような不思議な現象が頻繁に起きることから、学園に直接潜入して、事件の真相を探ったってわけ。

学園で知り合った女子生徒のシンシアやクララとともに謎を探り、結局黒幕は七魔王の配下の一人だったことが判明。

そいつを倒すことで事件は解決した……が、結局試練とは無関係だったんだよね。

だけど僕はつくづく魔王に縁があるみたい。だって学園の事件を解決した直後、今度はなんの因果か、別の依頼をこなしている時に、魔王本人と出くわしてしまったんだから。

さすがは魔王、一時は瀕死にまで追い込まれたけど、激戦の末、なんとか倒したって感じだった。

だがそのせいで、魔王を倒した英雄として、僕の名前が広く知れてしまったというわけだ。

最近では僕のが新聞なんかでも取り上げられているらしく、知り合いに声を掛けられることも増えた。

本音を言えば少々うっとうしい。

早く巡礼の旅を再開して、知り合いの少ない土地に行きたいよ。

まあ、シンシアとクララが僕らの旅に同行するために、父方の祖母——とー祖母ちゃんおばあちゃんの修業を受けているから、今すぐにつてわけにはいかないけど。

シンシアとクララは、僕らが旅をしていると聞いて、同行したいと言ってきた。

でも二人の実力では旅の中で命を落としかねないってことで、一ヶ月カナイ村での修業

を耐えられたら同行を許可するということになった。

僕は正直、彼女達がすぐにギブアップすると思っていた。

しかし二人は懸命に修業に取り組み、昨日から天鏡転写を用いた訓練までしているらしい。

天鏡転写とは、映った人間と同じ能力を持った分身体を生み出し、指定した相手を襲わせる鏡の魔道具だ。

その分身は元の人間と同じ能力を持ったため、倒すには何かしらの策を講じて自身を成長させなければならぬが、もし勝てれば大きくレベルを上げることが出来る。

ここまで頑張っている二人を置いていくことはさすがに出来ない。

まああの訓練をクリアするのに、僕で四日、リツカは一週間以上かかったから……あの二人だと今から二週間経っても終わらなそうなのがするけど。

そんなわけで、巡礼旅を再開するのはもう少し先になるわけだ。だから、今僕が冒険者ギルドへ向かっているのは、空いた時間を潰すためなんだよね。

今までのことを振り返っているうちに、気付けばギルドの前にとり着いていた。

僕はドアを開けてギルドの中に入る。

すると、内部にいた冒険者や職員の方々が一斉にこちらを見る。

……やれやれ、まあ気にしても仕方ないか。

僕は視線を無視して受付カウンターに行き、受付嬢のサーシャさんに声を掛ける。
サーシャさんは僕が初めてここに来た時に対応してくれたお姉さんで、それ以降も色々とお世話になってる。

「サーシャさん、何か依頼はありますか？」

「リユカ君……いえ、英雄リユカ様！ ようこそお越し下さいました」

サーシャさんはわざとらしいほど丁寧な口調でそう口にした。

「もう、普通に呼んで下さい。『英雄』だなんて言われると、恥ずかしいですよ……」

僕がそう言うと、サーシャさんは小さく笑う。

「ふふ、分かりました。それで、依頼ですよ。そうそう、リユカ君に貴族から指名依頼が入っていますよ」

「貴族の依頼？ ガーライル侯爵からですか？」

ガーライル侯爵はこの辺りに住んでいる貴族。かつて彼の娘であるアリシア様の警護を依頼されたことがあるのでまた何か頼み事してきたのかと思ったのだ。

しかし、サーシャさんは首を横に振る。

「いえ、ハイランダー公爵からです」

ハイランダー公爵は武勲で名を馳せた貴族で、国王陛下の護衛隊、ロイヤルナイツの団

長をやっている人だったはず。

確か奥さんもその副団長で、彼の家は貴族の中でも高い実力や財力を持っているとか。直接関わったこともないのに、なんでそんなところから指名依頼が来たんだろう？

僕は少し考え、尋ねる。

「依頼って……まさか、『英雄の力を試したいから手合わせしろ』とかじゃないですよ。ね？」

「今回の依頼は旅に出るご子息の護衛だそうです。話によると、ハイランダー公爵の師は剣聖ジェスター様なので、それでリユカ君に依頼したんだとか」

ジェスターとは僕の父方の祖父——と祖父ちゃんのことだ。

と祖父ちゃんがかつて剣聖と言われ、多くの弟子を持っていたらしい。

それなら、僕に依頼が来るのも納得だ。

ただ、それでも疑問は残る。

「じつちゃんの弟子なら、ご本人も相当強いでしょうし、公爵家ともなれば、お抱えの騎士だっているでしょう？ なのになぜ外部に護衛依頼を出すんでしょうか」

「なんでも今回は護衛の騎士は付けないらしいです。その理由までは分かりませんが……」
うーん、大切な息子が旅に出るといふのに、それは些か不自然だ。

僕は少し考えてから口を開く。

「……依頼を受けるかは別として、とりあえず話を聞いてきます。ハイランダー公爵のお屋敷に行けばいいんですよね？」

「はい。ちなみに……場所はご存知なのですか？」

心配そうに尋ねてくるサーシャさんに胸を張って答える。

「大丈夫です。何度か前を通りかかったことがありますから！」

「そうですか、ではリユカ君が訪問する旨を、通信用の魔道具でお伝えしておきます。よろしく願いますね！」

僕はサーシャさんに頭を下げ、ギルドを後にした。

ギルドを出てすぐ、転移魔法でハイランダー公爵家の前まで移動する。

転移魔法は一度行ったことがある場所なら、どんなところへも一瞬で移動出来る優れたものだ。

ちなみに僕は村で何気なく習ったけど、転移魔法は伝説の魔法と呼ばれているんだとか。屋敷の外観を眺め、一人呟く。

「……いつ見てもデカイ屋敷と庭だよなあ……」

ハイランダー公爵家の敷地は、ガールイル侯爵家よりも遥かに広い。

どころかカナイ村より断然大きいだろう。

そう思いながら門の前に行き、警備をしている騎士に声を掛ける。

「冒険者ギルドの依頼で参りました、リユカ・ハーサフェイと申します。ハイランダー公爵にお会いしたいのですが……」

すると、騎士は右手を差し出してくる。

「ギルドカードをご提示ください」

ギルドカードを渡すと、騎士はそれと僕を交互に見て、頷いた。

「こちらへどうぞ、公爵がお待ちです」

それから彼に案内されるまま、庭を歩く。

屋敷の前に来たところで、今度は執事と思われる人がやってきた。

屋敷の内部はこの人が案内してくれるのかな？

執事の後について、更に五分ほど歩いたところで、公爵の執務室の前にたどり着いた。執事は扉をノックする。

「冒険者ギルドから来られた、リユカ様をお連れしました」

すると、扉の向こうから返事があった。

「よかろう、通せ！」

「失礼します！」と言って、執事は扉を開ける。

部屋はそれなりに広く、奥には執務用の机、その手前に来客用と思しき長テーブルと、

それを挟むようにして三人掛けのソファが二つ置かれていた。

室内に入ると、四十代前半くらいの体格の良い男性が近づいてくる。

この人がハイランダー公爵なのだろう。

と一祖父ちゃんの弟子だけあって、普段から鍛えているんだな。

そんなことを思っていると、ハイランダー公爵は口を開く。

「貴公がリユカ殿か？」

「はい、リユカ・ハーサフエイと申します」

僕が丁寧な口調で答えると、ハイランダー公爵は続ける。

「ジェスター殿はお元気かな？」

「……元氣すぎて困るほどには」

僕が少し悩んでから言うと、ハイランダー公爵は豪快に笑いだす。

「ははは！ やはりジェスター殿はお元気なのだな！ それなら良かったよ」

それから、ハイランダー公爵は修業時代の思い出や、苦勞話を聞かせてくれた。

公爵だからお堅い人なのかとも思っていたのだが、意外と親しみやすい人で良かった。

軽く一祖父ちゃんの話で盛り上がった後、僕とハイランダー公爵は向かい合うようにソファに座る。

「ではそろそろ、今回の依頼について話すとしよう。ギルドでも聞いただろうが、リユカ殿には遠征に向かう息子、シユヴァルツの護衛を頼みたいのだ」

ハイランダー公爵は腕を組みながらそう言った。

僕は気になっていたことを尋ねる。

「護衛に騎士を付けないとお伺いしましたが――」

「おっと、もう少し肩の力を抜いてくれていいぞ。我らは同じ師から剣術を学んだ同志だからな」

僕の言葉を遮るように、ハイランダー公爵はそう言って笑った。

ずっと気を張っているのも疲れるので、その心遣いありがたい。

僕は咳払いをしてから、改めて尋ねる。

「では、失礼して……なぜわざわざ僕に依頼を？」

「実は息子が自分の手で魔物を倒しながら旅がしたいと言いだしてな。しかもお抱えの騎士隊とじゃなく、冒険者と一緒がいいらしい。そこで、魔王を倒した英雄であり、実力のあるリユカ殿に声を掛けただ」

なるほど、要は貴族の我儘息子が、冒険者ごっこをしてみたくなったわけか。

なんとというか……予想以上にくだらな理由だったな。

僕は思わず小さく息を吐く。

「はあ、魔物と戦うのは命懸けですよ。そのような動機で旅をするなんて、僕はどうかと思いますが……」

「私もロイヤルナイトの団長をしているから、戦いの恐ろしさは嫌と言うほど分かっているつもりだ。ただ最近息子がほとんど傲慢になってきていてな。どこかで一度挫折を味わってほしいんだ。だからリユカ殿に頼みたいのは息子がピンチになった時に助ける役目——」

その時、執務室の扉が勢いよく開く。

扉の前には、僕と同じくらいの年齢の少年が立っていた。

ハイランダー公爵が怒鳴る。

「おいシユヴァルツ、今は来客中だぞー」

その呼び名から、彼が件の我儘息子だと分かった。

シユヴァルツはハイランダー公爵の言葉を無視して部屋に入ってくる。

「英雄リユカがこの屋敷に來ているって聞いてな……こいつか？」

そう言つて、僕に不躰な視線を向けてくるシユヴァルツ。

態度や口調からも、生意気さが伝わってくるな。

シユヴァルツは僕の近くにツカツカ歩いてきて、口を開く。

「弱そうな奴だな。本当にお前が英雄なのか？」

「なんですか、このクソ生意気なガキは？」

僕は思わずハイランダー公爵にそう聞いてしまう。

だつてムカつくんだもん、こいつ。

するとハイランダー公爵が何か言うより先に、シユヴァルツが僕の胸倉を掴んでくる。

「お前！ 俺は公爵令息だぞー」

さつきから本当に失礼な奴だな。

これなら氣を使う必要はないなと思ひ、僕は鼻で笑つてやる。

「だからなんだ？ 公爵家に生まれたただけのガキが偉そうに！ 自分の力で何も為していない者は、平民と同じだ！」

僕がそう言つと、シユヴァルツは顔を真っ赤にして、鋭い視線を向けてくる。

「お前、俺を平民扱ひしたな……？」

そう言つとシユヴァルツは胸倉を掴んでいるのと逆の手を握り込み、拳を振るつてきた。僕は容易くそれを避けると、シユヴァルツを突き飛ばし、ハイランダー公爵に視線を向ける。

「ハイランダー公爵に申し上げます。護衛依頼の件、お断りさせていただきます。礼儀のなつてないガキのお守りなんて真つ平ごめんですから」

僕はそう言つて立ち上がると、頭を下げて出口へ歩きだした。

その時、背後からシユヴァルツの声が聞こえてくる。

「おい待て！ さっきの侮辱を許してはいないぞ！ 俺と勝負しろ！」
 僕は振り向くと、小さく息を吐いて答える。

「断る」

「何!? 臆したのか?」

「弱い者いじめは好きじゃないからね」

そう告げて、再度部屋から出ようとした。

だが、今度はハイランダー公爵が言う。

「リュカ殿、私からもお願いする！ シュヴァルトと戦ってもらいたいのだが……可能だろうか?」

シュヴァルトと違って、誠意に満ちたハイランダー公爵の声に足を止める。だが、ここまでのことをされて、素直に頷くわけにはいかない。

「申し訳ありませんが、お断りさせていただきます。僕は冒険者ですから、タダ働きはしたくありません」

「では、息子との勝負を依頼として受けていただくのはどうかな?」

ハイランダー公爵はそう言うのと、僕の近くに寄ってきて囁く。

「息子の無礼を謝罪しよう。あいつの性根を叩き直すために、勝負を受けてくれないか。死なない程度になら思い切り痛めつけて構わないし、報酬も出す。頼む！」

改めてお願いしてくるハイランダー公爵。

そう言えば以前にもこんなことを言われたな。

確かあれは駆け出し冒険者パーティ【**全員の期待**】のサポーターを務めるよう頼まれた時だ。

あの時も生意気な奴の面倒を見る前に、お灸を据えていいって言われたんだよな。

まあ、こういうタイプを改心させるなら、実力を見せるのが手っ取り早いってことか。

僕は少し考えた後、改めてハイランダー公爵に向き直る。

「……そういうことでしたらお引き受けしましょう。それで……どこで戦えば良いのですか?」

僕の言葉に、ハイランダー公爵は笑みを浮かべた。

「助かるよ。それでは早速訓練場に案内しよう」

「よし、見ているよ、吠え面かかせてやるからな！」

シュヴァルトはそう言うのと、先に出ていってしまった。

僕はその後、ハイランダー公爵に続いて部屋を出た。

十分ほど歩き、屋敷の中にある訓練場に案内された。

部屋の中には何も無い。僕とシュヴァルトは部屋の中央へ歩いていき、五メートルほど

距離を空けて向かい合う。

「では、双方構えて……始め！」

審判であるハイランダー公爵の声を合図に、僕とシュヴァルツは剣を抜いた。

だが僕は、目を閉じて構えを解く。

「なんだ降参か？ それとも俺にビビったのか？ 英雄といっても大したことはな——」

シュヴァルツの言葉を遮り、僕は言う。

「弱い奴ほど饒舌になると習わなかったのか？ 御託は良いから来い！」

「くそっ！ 馬鹿にしゃがって！ くらえ！」

シュヴァルツはそう叫びながら剣を振るい、連続攻撃を仕掛けてくる。

しかし僕は目を瞑ったまま、それらを全て躲していく。

するとシュヴァルツは、「騎士剣」のスキルを使い、連撃の勢いを増してきた。

この年で、「騎士剣」が使えるとは……正直驚きた。

剣の腕だけを見たら、平均的な冒険者以上だろう。

大きな口を叩くだけはあるってことか。

だが、その程度で僕に勝とうだなんて、甘い。

「なぜだ!? なぜ……目を閉じてるのに「騎士剣」を躲せるんだ!?」

シュヴァルツは焦ったように声を上げた。

審判をしているハイランダー公爵が呟くのが聞こえる。

「驚いたな……あの年齢で「心眼」を使いこなしているのか……」

そう、これが空気の流れや相手の気配で、攻撃の種類や位置を察知する技術、「心眼」だ。

極めれば相手を見ずとも、どんなスキルを使っているかさえ手に取るように分かる。

まあ、この程度の相手にわざわざ使う必要はないが、実力差を思い知らせるため、あえてやっているのだ。

その後もシュヴァルツは剣を振り回し続けたが、ついぞ僕に当てることは叶わなかった。やがて彼の動きは鈍くなっていき……ついには膝を突いた。

まあこれで実力差は痛いほど分かっただろうし、痛めつける必要もないか。

僕は目を開け、シュヴァルツから離れる。

そしてハイランダー公爵に近づいた。

「これで終わりのようですね？ では公爵……報酬をいただけますか？」

だが、僕がそう言った次の瞬間、シュヴァルツは起き上がり叫ぶ。

「まだだ！ 秘剣・「ソニックブーム」！」

シュヴァルツが剣を振ると、斬撃がこちらに向かって飛んできた。

「ソニックブーム」とは、刀身に纏わせた魔力を放つ飛刃技の一種だ。

本来であれば、隊長クラスの騎士でなければ使えない高等剣技である。シュヴァルトはやはり中々優れた才能を持っているようだ……が、甘い！ 僕は向かってくる「ソニックブーム」を一振りでかき消し、反撃技を放つ。

「秘剣・「ソニックブレスト」―」

「ソニックブーム」で飛ばせる刃は一つだが、「ソニックブレスト」は同時に五つ飛ばせる。

つまり、「ソニックブレスト」の方が圧倒的に上位の技なわけ。

僕が放った五つの衝撃波を全て食らったシュヴァルトは、後方に吹き飛んでいった。

今回は刀身の刃ではなく峰に魔力を纏わせて放ったので、体は斬れないが、一発一発が木刀で殴ったのと同じくらいの威力を持っていたはずだ。

現に「ソニックブレスト」を食らったシュヴァルトは意識こそかろうじて保っているものの、動くことすら出来ないみたいで、地面に倒れ込んでいる。

その様子を見たハイランダー公爵が口を開く。

「それまで！ 勝者、リユカ殿！」

僕はその言葉を聞いて、剣をしまった。

すると、ハイランダー公爵が驚いた顔で声を掛けてくる。

「私ですら「ソニックブレスト」は教わらなかったのに……リユカ殿は本当に過酷な修業



をこなしてきたのだな」

「僕はとー祖父ちゃん達に死ぬ程シゴかれましたからね。弟子より親族の方が、遠慮なく鍛えられるのは当然でしょう」

まああの人達に遠慮なんて発想があるかは怪しいが。

そんなことを思っていると、ハイランダー公爵が「約束の依頼料だ」と言って、金貨を一枚渡してくる。

僕はそれを受け取ると、ポーションを懐から取り出した。

「そのポーションは……なんだか色が普通のものど少し違うな？」

そう聞いてきたハイランダー公爵に、僕はポーションの効果を説明する。

「このポーションを飲むと徐々に怪我が治っていきます。しかし副作用として治るまでの間に、攻撃を食らった際の十倍の痛みに襲われるんです。シュヴァルツの性根を直すには良いかと思ひまして」

「ほう、それは懐かしいな。私も修業の時、痛みを増すポーションをよく飲まされたものだ。言われてみれば、こんな色をしていた気もする」

このポーションはとー祖母ちゃんが作ったものを改良したものだだったが、ハイランダー公爵も似たようなものを飲んだ経験があるのか。

っていうかシュヴァルツに飲ませるのは反対されるかとも思ったけど、そうでもないみたい。

たい。

この人もとー祖父ちゃんの修業を乗り越えているから、感覚がズレているのかも。

そんなふうにいるながら、地面に蹲るシュヴァルツにポーションを飲ませた。

すると、シュヴァルツがのた打ち回り始める。

息子の様子を見つつ、ハイランダー公爵が懐かしむように言う。

「私もカーディナル殿から痛覚五十倍ポーションを飲まされた時は辛かったなあ……」

「え？ 百倍じゃないんですか？」

「何？ 今はそんなものがあるのか？」

「僕が修業していた時は百倍ポーションでした。そう考えたら十倍なんて、軽い軽い！」

それからしばらく雑談に興じているうちに、シュヴァルツは気絶して動かなくなった。怪我はすっかり治っているようで、一安心である。

だが念のため体を診るということで、一緒に試合を見ていた執事達数人が、シュヴァルツを治療室に連れて行った。

ハイランダー公爵は小さく呟く。

「……これで、少しは態度を改めてくれるといいが……」

やはりハイランダー公爵は、息子の性格を心配しているらしい。

だが、あの性格はすぐには直らないだろうな。あつ、でもアレを経験すればさしものシユヴァルツも改心するんじゃないか!?

そうと決まれば、ハイランダー公爵にお願いしてみよう!

僕は思いついたことを頭の中でまとめると、口を開く。

「ハイランダー公爵は今、お暇ですか?」

「差し迫った公務はないな……ここ最近忙しかったが、ようやくいち段落ついてね。向こう一ヶ月ほどは落ち着いているよ」

「奥様もですか?」

「無論……だが、それがどうかしたのか」

ハイランダー公爵は首を傾げた。

僕はニヤリと笑って言う。

「実はご子息の性格を変えるのいうってつけない場所があるんです! 僕の故郷の村なんですけど……丁度近々魔狐祭というイベントがあり、それに参加すればご子息の考え方にも変化が表れるはず!」

魔狐祭とは、カナイ村で毎年一週間ほどかけて行われる、魔物の狩猟祭のことだ。

カナイ村では毎年決まった時期の一週間ほど、土地の魔素が一気に増大して魔物が増殖する。

まあ一種のスタンピードが起こるわけだ。

村人達だけで増殖した魔物を全て倒すのは骨が折れるので、この時期が近づくと【黄昏の夜明け】の弟子達を中心に、村の外にいる実力者を呼び集めるのだ。

まだ魔狐祭が始まるには少し時間があるが、魔物が少しずつ増え始めており、とー祖父ちゃん達は忙しそう。

実力者と思しきハイランダー公爵に村に来てもらえれば、とても助かるんだよね。

「リュカ殿の故郷というところ……カナイ村だよな? それに魔狐祭って……」

ハイランダー公爵は、顔を青くしてそう零す。

どうやら魔狐祭のことも知っているようだ。それなら話は早い。

「ご子息の曲がった根性も矯正できますし、レベルも上げられて一石二鳥です。行きましよう!」

ハイランダー公爵は口ごもる。

「いや、でも、私達はしばらく休息を……」

「美しい自然に綺麗な空気が、そして美味しい魔物達……観光には持ってこいですよ!」

「だが……ジュエスター殿もお忙しいと思うし……」

煮え切らないハイランダー公爵。

まあ気持ちは分かる。もしとー祖父ちゃんに会ったら絶対に修業させられるだろうし、

魔獵祭に本格的に巻き込まれたら、休むところではないからな。

だが、僕はそろそろ旅に出してしまうから、代わりに腕の立つ人を少しでも村に呼んでおかねば。

もし人手が足りなくなつて、旅に出られない、なんてことになったら困るからね。

僕は更に語気を強めて言う。

「ハイランダー公爵は、ガーライル侯爵をご存知ですよね？」

「ああ、知っているが……」

「数ヶ月前に、ガーライル侯爵とその配下の騎士達が僕の村に修業しに来たのですが……全員すごく強くなって帰っていきました。きつとこ子息も更に実力を付けられると思います！」

そう言つて僕はハイランダー公爵に詰め寄る。

しかし、彼は首を縦には振ってくれない。

「その……妻にも聞いてみないといけないしな……」

「では、早速聞きに行きましょう。さあさあ！」

僕はそう言つて、ハイランダー公爵の背中を押して、公爵夫人の部屋に向かわせるのだった。

訓練室を後にして十分後、僕とハイランダー公爵は、公爵夫人——オリビアさんの執務室を訪れていた。

この部屋も、ハイランダー公爵の部屋と同じ構造になっている。

僕はソファに座り、向かいにいるオリビアさんに頭を下げる。

「初めまして……リュカ・ハーサフェイと申します。突然押しかけてしまい、申し訳ございません」

すると、オリビアさんは穏やかな笑みを浮かべる。

「ふふ、いいのよ。トリシャちゃんの息子さんが来てくれるって話は聞いていたし、私も会いたかったものよ」

「トリシャちゃん……？ 母とお知り合いなんですか」

オリビアさんは母さんとの関係を説明してくれた。

なんでも、オリビアさんもカナイ村で修業していた時期があるらしく、そこで母さんと知り合つたらしい。

オリビアさんがロイヤルナイトの副団長になれるほどの実力者だと考えると、納得できる話ではある。

「私とトリシャちゃんは同い年で、すぐに仲良くなつたのよ。ちなみに、リュカ君が生まれる時には私も立ち会つたのよ。双子だったのよね？」

オリビアさんの言葉に僕は頷く。

「はい、妹はリツカといます」

「そうそう、リツカちゃんね。懐かしいわあ!」

そう言って、楽しそうな表情になるオリビアさん。

対照的に、ハイランダー公爵は冷や汗を流している。

オリビアさん、カナイ村に行きたがりそうだしね。

「そういえば、シュヴァルツはどこにいるのかしら? 英雄の顔を見てくるって息まいていたけど……」

オリビアさんは思いだしたかのようにそう言うと、周囲を見回した。

僕は言葉を選びながら説明する。

「先ほどまで模擬戦もぎせんをしていたのですが、力が入りすぎてしまい……怪我はないのですが、

気絶させてしまいました。申し訳ありません」

すると、オリビアさんは笑う。

「いいのよ! あの子は最近どんどん我儘になってきていたから。いい葉になるわ!」

……なるほど、オリビアさんもシュヴァルツの性格には思うところがあるのか……チャ

ンスだな。

「それなら、ハイランダー公爵と奥様、そしてご子息でしばらくカナイ村に滞在たいていされませ

んか? ご子息もあそこで修業すれば心身ともに強くなるはずです! それに近々魔獵祭

がありますので、もしよろしければ力を貸していただけたら……と」

僕がそう言うのと、オリビアさんは手を叩く。

「カナイ村! いいわねえ……久々に行きたいわあ! トリシヤちゃんにも会えるし……

あつ、でも、ここからだとかなり遠いわねえ!」

「心配ありません! 僕の転移魔法を使えば、今からでも行けますよ!」

すると、オリビアさんは「まあ素敵!」と言って、ニコニコと笑った。

その様子を見たハイランダー公爵は肩を落とした。

とはいえその後、「まあ、久しぶりにジエスター殿にお会い出来るなら……」と言って

いたので、心の底から嫌というわけではないのだろう。

そんなこんなで話は纏まった。

カナイ村に行くための準備をもらい、また明日、ここに迎えむかにくることになったの

で、僕は屋敷を後にした。



翌日、僕は約束通り再びハイランダー公爵の屋敷を訪れた。

昨日の夜、村に帰った時に、家族の皆には一通り話を伝えてあるし、宿も確保済みである。

屋敷の前に行くと、ハイランダー公爵にオリビアさん、そしてシュヴァルツと、数人の執事が待っていた。

シュヴァルツはこちらを一瞬睨んできたものの、すぐに視線を逸らす。

まだ敵意を抱いているようだが、初めて会った時みたいに突っかかつてはこない。多少は認めてもらえたのかもな。

そんなことを考えつつ、僕はハイランダー公爵に声を掛ける。

「行くのはご家族の三人だけで良いんですか？」

「うむ！ あとは頼んだぞ！」

ハイランダー公爵が執事達を見てそう言うのと、彼らは揃って頭を下げてくる。

「……いってらっしゃいませ、旦那様」

挨拶が終わったことを確認し、僕は唱える。

「では、転移・カナイ村！」

一瞬で僕ら四人は荷物とともに、カナイ村に移動した。

僕ら四人は家の前の庭へ。

僕は薪割りをしているとー祖父ちゃんに声を掛ける。

「とー祖父ちゃん。昨日話していた通り、ハイランダー公爵達を連れてきたよ」

とー祖父ちゃんはこちらを振り返ると、笑みを浮かべる。

「おお、シユナイダーにオリビアか！ 久しいのう！」

ハイランダー公爵とオリビアさんは頭を下げた。

「お久しぶりです、ジェスター殿！」

「ジェスター様、御無沙汰しております！」

「二人とも、元氣そうで何よりじゃ。で、後ろの子は……」

とー祖父ちゃんはそう言っつてシュヴァルツを見た。

ハイランダー公爵が口を開く。

「息子のシュヴァルツです」

シュヴァルツは素直に頭を下げた。

僕に会った時と同じように何かしら文句を言うかと思っただが、さすがに「黄昏の夜明け」の妻さは分かっているということか。

僕はとー祖父ちゃんに言う。

「シュヴァルツに修業の手ほどきをしてほしいんだ。あと……ハイランダー公爵はどうしますか？」

「私は……」

ハイランダー公爵が何か言う前に、とー祖父ちゃんが口を開いた。「シユナイダーも久々に手合わせをするか？ 腕が鈍っていないか確認してやろう！」その言葉を聞いたハイランダー公爵は苦笑いする。

「……お手柔らかにお願いします！」

シユヴァルトとハイランダー公爵は武器を取りに庭の奥へ歩いていった。

残された僕はオリビアさんを連れて、家の中に入る。

すると母さんが、ハイランダー公爵夫人を見て駆け寄ってきた。

二人は抱き合い、互いに声を掛け合う。

「久しぶりね、トリシヤちゃん！」

「本当にね、オリビアちゃん！」

二人の再会に水を差すのは悪いと思ひ、僕は再度外に出る。

すると、既にとー祖父ちゃんとハイランダー公爵、そしてシユヴァルトが剣で激しく打ち合っていた。

「おいおい、軽くだが衝撃波が発生するくらい本気でやらなくても……」

僕は巻き込まれたらまずいと思ひ、早々に家を離れる。

行き先は、シンシアとクララのところだ。

最近二人の修業を見ていないし、様子が気になる。

「そういえば、リッカはどこにいるんだろ？」

移動しながら索敵魔法で調べてみると、リッカは二人の近くにすることが分かった。

二人を見に行けば会えそうだな。

そう思いながら、僕は三人がいるであろう、街の外れに向かった。

第二話 リッカへの復讐（食事中の人が見ていたらごめんなさい！）

街の外れに行くと、シンシアとクララが天鏡転写によって生み出された分身体——シャドウと戦っているのが見えた。

僕はそれを近くで眺めているリッカに声を掛ける。

「二人はどんな感じ？」

「クララは順調だけど、シンシアは苦戦しているみたい」

リッカの言葉を聞いて、僕は改めてじっくりと二人を眺める。

二人は魔法の発動を助ける魔法杖——ワンドを武器に、シャドウと戦っていた。

……なるほど、学園にいた頃と比べれば、二人とも恐ろしく成長しているけど、シャドウを倒すにはもう一歩足りないかもね。

「よし、少し休憩(きゆうけい)にしよう」

僕はそう呟くと、シンシアとクララのシャドウを魔法で拘束(こうそう)する。すると二人は驚いたようにこちらを見た。

「どうやら戦いに夢中で、僕に気付かなかつたらしい。」

僕は収納魔法にしまつてあつたレジャーシートや食べ物を取り出し、彼女達に手を振る。シンシアとクララは僕の意図を察したようで、駆け寄つてきた。

四人でレジャーシートを敷いた地面に座り、取り出した軽食や飲み物を口に始める。

収納魔法は生物以外のものならなんでも、時を止めた状態で異空間に収納出来る魔法だ。容量の制限もほとんどないので非常に重宝(じゆうほう)している。

休憩しながら、僕は戦いを見て感じたことを二人に伝えていく。

「クララは追い詰められるとムキになつて、攻撃魔法を乱発してしまう傾向があるね。ピンチの時ほど落ち着いて、弱体魔法を駆使してチャンスを狙つたほうがいい」

僕の言葉を聞いたクララは、真剣な表情で頷く。

「なるほどね……追い詰められると急いで倒さなきゃって気持ちになっちゃうけど、確かにそっちの方がいいわね。魔力消費も抑えられるし」

その返事を聞いて満足した僕は、次にシンシアを見る。

「そしてシンシアなんだけど……これを使つて戦つてみてほしい」

僕はそう言つて、収納魔法から手製のレイピアを取り出し、シンシアに渡した。

シンシアは武器を手に取り、言う。

「このレイピア……魔力を感じます」

「これは鎧(よろい)の部分に魔石を入れてあるから、ワンドの機能も持っているんだ。シンシアは魔力量が多くて魔法も上手(うま)いけど……杖で戦うのが苦手(にくて)なんじゃないかって思ったから」

「どうやらシンシアにも思い当たる節があるみたいで——」

「実は幼少から騎士の兄とよく剣の手合わせをしていたので、剣の方が扱いは慣れていいます。でも魔法学園で、剣よりも杖を使った方が良くと教わりまして」

なるほど、まあ魔術師を育てる学園ではそう指導するだろうな。

でもシンシアは遠距離からの魔法戦よりも、接近戦をしながらサブで魔法を使う方が向いていそうだ。

それから、三十分ほど掛けて僕はシンシアにレイピアの使い方教えるのだった。

三十分後、シンシアとクララが僕らから離れシャドウと向き合ったのを見て、拘束魔法を解く。

再び戦闘が始まる。

僕は改めて二人の戦いを眺める。

……クララもシンシアも、先ほどより戦い方が良くなったね。
 クララは魔法を無駄撃ちしなくなったし、余裕を持って立ち回れている。
 シンシアは予想以上にレイピアの扱いが上手く、敵に接近された時も慌てていないな。
 どうやらリッカも同じことを思ったようで、嬉しそうに頷きながら言う。
 「クララの動きが良くなったのは当然凄いいけど、シンシアがこんなに剣の扱いが上手いな
 んて驚いたよ」

確かに、シンシアの剣術は想像以上に板についている。

魔法学園にいた時には見ることはなかったけど、かなり訓練していたんだな。

「そういえば、今のシンシアとクララってレベルいくつなんだろう?」

僕がふと呟くと、リッカが答えてくれる。

「学園にいた時はレベル13前後だったと思う。でも少し前にヘルクラブを倒せるようになっただから、今は50くらいじゃないかな?」

……つてことは、シャドウを倒せれば、レベルは70〜80台くらいにはなるか。

それだけあれば、旅の同行を許してもいいかな。

そんなことを思いながら、僕は戦いを眺め続けるのだった。



僕がアドバイスをしてから、クララは十四日後、シンシアは十六日後にシャドウを倒した。

当初の想定よりも時間がかかってしまったが、これでようやく旅を再開出来る。

旅に出る日も決まり、今はその前日の深夜だ。

僕は一人、リッカの寝室に忍び込もうとしている。

目的は仕返しだ。

つい先ほどまで家族の皆や家に滞在するハイランダー公爵一家、あとは村で修業をしていたガイアンも含めて、シンシアとクララが修業を終えたことを祝うパーティが行われていた。

パーティは最初は平和に盛り上がっていたのだが……誰かが持ってきた酒をリッカ、シンシア、クララの三人が飲んだところから、僕にとつて地獄の時間変わったのだ。

みんな十五歳以上なので成人にはなっているからお酒を飲んでも問題ないのだが、三人は泥酔して、僕に絡んでくるようになったのである。

その中でも最悪だったのは、酔っぱらったリッカが性別を変えるメイク魔法を僕に放ち、体を女性のものに変えたことだろう。

リッカは女性になった僕の服を脱がし、どこからか持ってきたセクシーなランジェリー

立ち読みサンプル はここまで